

グラハム

物心つく前からわかっていた。生きることには不自由なのだ。身寄りがなく、差し伸べられる施しもなく、私は窮屈という名の泥地を這いずり回ることでしかない……それが、私の運命……。見あげると、空はこんなにも青く、果てしなく広がっているのに……あんなにも自由だというのに。

私という人間を縛りつける、この大地から離れたい。

鳥のように、空を自由に飛び回りたい。

貧富、格差、束縛……全てを振り払って、あの空へ。

自由へ。故に、私は軍に身を置いたのだ。

モビルスーツのパイロットになり、大空を自由に飛び回るために。

海軍の一兵卒から精進を重ね、昇進を繰り返し、

ようやく手に入れた尉官の座と、モビルスーツ・ファイターの

資格……しかし、そこでもまた、私は不自由に苛まれる。

士官学校出のファイターたちからの嫌がらせ、

まるでこの場所から振るい落とさんとばかりに与えられる

過酷な訓練、日常生活もまた然り。

それでも耐えることができたのは、モビルスーツで空を飛べるからだ。その瞬間だけ、私は自由に、空を独り占めすることができた。

この悦樂を手放せるものか。私は逆境に挑み、  
恩師の死すら乗り越え、ついにモビルスーツ・ファイターの  
最高峰である《MSWAD（エムスワード）》の小隊長に  
着任するまでに至った。

グラハム

ハワード・メイソン、ダリル・ダッジ…  
私を慕う優秀な部下にも恵まれた。まさに順風満帆。  
私は人生の絶頂を謳歌していた。

ロールアウトしたばかりの最新鋭モビルスーツ《フラッグ》で  
慣性飛行中、コクピット・キャノピーを開けた私は、  
無限に広がる空に向かって叫ぶ。

私はついに手に入れた！

この空に、私に対抗できる存在はいない！

この空は私のものだ！

しかし、その数年後……彼が現れる。

グラハム

主燃料機関から光の粒子を放出し、  
自由に空を駆けめぐる白亜の機体。

モビルスーツ、ガンダム！

その圧倒的な性能を目の当たりにし、私は心奪われた。

そして、その出会いに感謝さえした。

乙女座の私が、センチメンタリズムな運命を感じずには  
いられないほどに。

今でも思う。あの時から、私とガンダムの小指には《赤い糸》が  
あったのだと。ガンダムは私にとって興味以上の対象となった。



グラハム

フラッグを凌駕する機体性能……  
私の前に立ちふさがり、乗り越えるべき存在……  
好敵手となったのだから。

一方的だと笑ってもらって構わない……しかし、敢えて言おう。  
この気持ち、まさしく《愛》だ！

しかし、ガンダムはそんな私の想いを、ことごとく袖にした。  
戦争根絶などという夢想を掲げ、紛争地帯に乗り込み、  
攻撃を仕掛けていく。技術顧問が、部下が、故国の人々が  
ガンダムに蹂躪されていく。

愛を超越すれば、それは憎しみとなる。  
行き過ぎた信仰が内紛を誘発するように。

ああ、そうだ。私はガンダムが憎い。  
あんなにも愛したあの機体が憎い！

故にガンダムを倒す！ 世界などどうでもいい。

私は己の意志でガンダムを倒す！ そして、私は修羅となった。  
傷ついた顔と過去を仮面で覆い、  
ただガンダムを打ち倒さんがための、

それ以外の全てを捨てた男に……たとえ、インバイターの  
傀儡（かいらい）に成り果てようとも……この武士道に殉じる。

今思えば、私は《死》を求めていたのかもしれない。

私が由（よし）とする死に場所を。ガンダムを打ち倒し、  
共に果てることを……そこが空であれば言うことはなし。

これぞ本望。グラハム・エーカーという男の人生に、  
一片の悔いすら！ そう願いつけて挑んだガンダムとの決戦で、  
私は二度裏切られる。

グラハム　ガンダムは……いや、あの少年は、私に《生きるために戦え》と告げ、勝利も、敗北も、死も、なにもかも置き去りにして私の元から去った。滑稽な話だ。

死に場所を求める男と、生きる意味を求め続ける少年。軍配はご承知の通り……。

故に、私はここにいる。

少年を導き、守り、E.L.Sと対話するという、彼の願いを果たした今、私は……今こそ、《死》を迎え入れてもいいと……。

刹那　『その結論は早すぎる』

グラハム　「なに?」

□エルスの中樞

グラハム　「なんと。今際の際に、少年が目の前に現れるとは死を間近にした人間は、走馬灯を見るといいうが……やはり、君と私は運命の赤い糸で結ばれているようだ。乙女座の私にはそれがわかる!」

刹那　「違う」

グラハム　「応えた!?　走馬灯のビジョンが私に語のかけくるとは……」



刹那 「俺は今、ここにいる。現存している」

グラフィム 「世迷い言を。私はブレイヴごとELSに汚染され、特攻したはず……」

刹那 「だが生きてる」

グラフィム 「なぜだ!?!」

刹那 「クアantum・バーストが発生させた量子空間の中にいるからだ」

グラフィム 「奇奇怪怪な! イノベーターでない者にもわかるよう説明を求む!」

刹那 「拡大した量子空間の中で、ELSがお前の思考を感じ取った。ELSはお前と共に生きようとしている。なぜだかわかるか? お前が、生きたいと願ったからだ」

グラフィム 「この期に及んで生きたいと願う? 私は自らに課した使命を果たした……もう、思い残すことなど……」

刹那 「空を飛びたいんじゃないのか?」

グラフィム 「うっ」

刹那 「お前の人生の絶頂は、

MSWAD（エムスワッド）の小隊長か？」

グラハム 「な、なぜ、それを……」

刹那 「俺には見える。お前の人生の絶頂は、まだ訪れていない……」

グラハム 「私にこの先がある！？」

「こんな体と成り果てた私に未来があるというのか！？」

刹那 「ある」

グラハム 「なにがある！？ 答えろ少年！」

刹那 「それは自らの目で確かめろ。そのためにも選べ。

お前が、同化しているE.L.Sを拒めば、

お前の生命活動は停止する。

しかし、E.L.Sとわかり合うというなら……」

グラハム 「わかり合えたら、どうなるというのだ！？」

刹那 「お前は、グラハム・エーカーであって、

グラハム・エーカーでなくなる。

人類とE.L.S、2つの特性を持つ存在に生まれ変わる」



グラハム 「生まれ、変わる……」

刹那 「選べ。選択するのはお前だ、グラハム・エーカー」

グラハム 「……フツ、フッフ……」

刹那 「なにがおかしい？」

グラハム 「案ずるな少年。私は既に選んでいる。

選んだが故に、君の気持ちを察すること 못했다」

刹那 「未来を、頼む」

グラハム 「いいだろう、その君の願い

このグラハム・エーカーが引き受けた！

さあ、心置きなく旅立つがいい！」

刹那 「感謝する」

グラハム 「さらばだ、少年！」

刹那 「帰ってくるぞ。

いつになるかは、わからないが……」

沙慈 「アレルヤさんからの直接通信?……はい、もしもし……」

アレルヤ 『沙慈・クロスロードくん?』

沙慈 「そつですけど……あの、いいんですか、直接会話なんかして」

アレルヤ 『ヴェーダを経由しているから、盗み聞きの心配はないよ。

それより、《ヒューマレスト》の件ではありがとう。

君が渡してくれたリストが大いに役立った。

ニュースでも取り上げられたから知っているとっけど、

ラグランジュ2にあった《ヒューマレスト》の本拠地は

僕らが制圧、無力化した。もちろん、無血でね』

沙慈 「……よかったです」

アレルヤ 『しかし、《ヒューマレスト》が掲げた

人間至上主義という思想に囚われている者たちが、

なんらかの活動を起こすかもしれない。

不穏な空気を感じたら、僕らに連絡して欲しい』



沙慈 「僕は、ソレスタル・ビーイングのエージェントですか?」

アレルヤ 『苦樂を共にした仲間だと思っているよ。

じゃまた……じゃないな。

僕らはもう、会ったり話したりしないほうがいい』

沙慈 「ですね。その方が、世界が平和になります」

アレルヤ 『さよなら、沙慈くん』

沙慈 「さようなら、アレルヤさん」

ライル 『ミッション・コンプリート』

ライル 「《ヒューマレスト》への武力介入はここまで。

後のことは、連邦議員のクラウドたちに任せよう」

アレルヤ 「そうだね。僕たちソレスタル・ビーイングは、

脅威であるだけでいい。悪意の抑止力にさえなれば……」

ライル 「咎(とが)を受けるのは、まだまだ先になりそうだ……」

アレルヤ 「今回のミッションの最大の功労者は、

ティエリ(ア) じゃない、レティシアだね。

彼は今、**ビュウ**……」

ライル 「補充人員を迎えに行ってる。ガンダム・マイスター候補だ」

アレルヤ 「レティシアが迎えに行ったってことは、イノベイドかな？」

ライル 「さあな、俺も詳しくは……」

おっと、レティシアのデュナメスのご帰還だ。

アレルヤ、新しいマイスターの面、拝みに行こうじゃないか」

アレルヤ 「一体、誰なんだろう……」

レティシア 『レティシア・アーデ、ガンダム・デュナメス・リペアスリー、  
トシミーに着艦します』

アレルヤ 「おかえり、レティシア」

ライル 「で、新しいガンダム・マイスターってどうよ？」

レティシア 「紹介しよう」



グラハム 「この度、ソレスタル・ビーイングへ入ることとなった、  
元地球連邦軍ソルブレイヴス隊長、  
グラハム・エーカー少佐であります！」

ライル 「嘘だろー！」

アレルヤ 「ぐ、グラハム・エーカーって……この人アレだよね、  
初期の頃から散々僕らに突っかかってきたユニオンの……」

ライル 「ミスター・ブシドーじゃねーか！」

グラハム 「ははっ、確かにそついうこともあった。懐かしい思い出だ」

アレルヤ 「美化してるよ」

ライル 「なんで、体の半分が銀色になってんだ？」

グラハム 「ははっ、私はE.L.Sと同化している」

アレルヤ 「やっつと言ったよ」

ライル 「た、確かによ、E.L.Sとの戦いでソルブレイヴス隊には  
世話になったが、それでもこの人事はいきなりすぎだろ」

アレルヤ 「いいのかい、レディシアア？」

レティシア 「ヴェーダも推奨してるし、スメラギ・李・ノリエガも了承している。そもそも、彼のソレスタル・ビーイング入りを強く希望したのは、刹那・F・セイエイだ」

アレルヤ 「刹那が」

グラハム 「嘘ではない。少年のガンダムが作り出した量子空間の中で、私は彼とわかり合った……  
彼の気持ちを感じることができた……」

回想刹那 『グラハム・エーカー……これから俺は、《対話》のために

ELSの母星へと向かう……しかし、心残りがあえる。

それは、世界の行く末……

そして、ソレスタル・ビーイングの……。

だから、あんたに俺の後を託したい。

ソレスタル・ビーイングのガンダム・マイスターとして、

世界の歪みを破壊してくれ。勝手な願いだとわかっている。

しかし、頼みたい。

俺が、俺たちが帰ってくるまで、世界を頼む……』

アレルヤ 「刹那が、旅立つ前にそんなことを……」



ライル 「まったく、刹那といいティエリアといい……  
アレルヤ、あいつら、俺たちがよっぽど頼りないと  
思ってたがる」

グラハム 「レティシア・アーテ、私のガンダムはどこにあるの？  
は、早く触れてみたいのだよ、私のガンダムにー」

レティシア 「あそこにある機体が、君が乗る予定のガンダムだ」

グラハム 「おお、これは……少年が一番最初に乗っていたガンダム、  
その改修型ではないか。  
さすがは少年、後を託すと言った私に粋な計らいをする」

アレルヤ 「偶然じゃないかな」

レティシア 「グラハム・エーカー……このガンダムの正式名称は、  
ガンダム・エクシア・リペアフオーだ」

グラハム 「そうか。ならば、今からこの機体を……  
グラハム・ガンダムとするー」

アレルヤ 「勝手に名前付けてる」

ライル 「入れ込みすぎだろ」

レティシア 「スメラギ・李・ノリエカからの緊急暗号通信……」

ライル 「なにがあった、レティシア」

レティシア 「中東の小国《リデラ》で軍事クーデターが起こったらしい。  
ソレストル・ビーイングは直ちに武力介入せよとの指示だ」

アレルヤ 「まったく、こりもせずに……」

ライル 「アレルヤ、レティシア、ガンダムを出さず！」

グラハム 「私も同行させてもらおう！」

ライル 「あんたは来たばかりだろうが」

アレルヤ 「無茶ですよ」

グラハム 「心配御無用！ 脳量子波を通し、  
少年からガンダムに関するレクチャーは受けている」

アレルヤ 「刹那のレクチャー？」

ライル 「おい、絶対無理するぞ。トランザム使っちゃって言うっても使っちゃ  
言うこと聞かねーぞ、絶対！」



グラハム 「確かにそのきらいはある。  
私は我慢弱く、落ち着きのない男だ！」

ライル 「頼むから落ち着けよ！」

グラハム 「行くぞ、フラッグ・ファイター！」

アレルヤ 「ああっ、勝手に行っちゃった……  
しかも、フラッグ・ファイターって」

グラハム 「なにをしている、急げ！」

レティシア 「了解！」

アレルヤ 「レティシアまでその気に……」

ライル 「はっ、ははっ、ははは……」

アレルヤ 「ロックオン？」

ライル 「まったく、刹那のヤツ、

とんでもねえ置き土産を残していきやがった。  
行こうぜアレルヤ、新生ソレスタル・ビーイング……  
新生ガンダム・マイスターの初陣だ」

アレルヤ 「刹那とティエリアが戻ってくるまで……」

ライル 「俺たちが世界と向き合おう」

アレルヤ 「行こう！」

ライル 「オーライ！」

アレルヤ 「ガンダム・ハルト。アレルヤ・ハプティズム、飛翔する！」

ライル 「ガンダム・サバーニャ。ロックオン・ストラトス。出るぜ！」

レティシア 「ガンダム・デュナメス・リペアスリー。

レティシア・アーテ、行きます！」

グラハム 「グラハム・ガンダム。グラハム・エーカー、

世界の歪みを破壊する！」